



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

1990年度英語英文学研究室研究会要旨

| | |
|-----|---|
| 著者 | 同志社大学人文学会 |
| 雑誌名 | 同志社大学英語英文学研究 |
| 号 | 54-55 |
| ページ | 289-292 |
| 発行年 | 1991-11 |
| 権利 | 同志社大学人文学会 |
| URL | http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001693 |

1990年度英語英文学研究室研究会要旨

第1回 1990年6月25日(月) 於香柏館第3共同研究室

報告者 田口哲也

T.S. エリオットにおける ‘Sweeney’ の位置について

エリオットの初期作品にしばしば登場する ‘Sweeney’ という人物に以前から不思議な気持ちを抱いていたのだが、今回は個々の作品を跨ぎつつ、この人物の正体究明に取り組んでみた。

“Sweeney Among the Nightingales”, “Sweeney Erect” など、詩のタイトルの一部にその名前が使われている二つの作品のなかで Sweeney はその特異な存在感をもっとも顕著に示している。だがそれだけにとどまらず、この人物は “Mr. Eliot’s Sunday Morning Service” の終わりにも唐突に現れるし、周知のように *The Waste Land* のなかの雑多なひとびとに混じって、短いけれども効果的に描写されている。つまり、詩人の心の中では、少なくとも第二詩集から *The Waste Land* にかけて Sweeney はオブセッションとまでは言わないまでも、一定の重みを持った人物として生き続けていたと言えよう。

しかしさらにその後 *Sweeney Agonistes* が発表される。この作品のなかの Sweeney はそれまでの Sweeney のイメージとかなり違っており、この違いをどう説明するかをめぐってさまざまな議論がなされてきた。即ち、*The Waste Land* までの Sweeney と *Sweeney Agonistes* の Sweeney との間に連続を認めるのかあるいはそうではないと見るのかという議論であった。例えば T.H. Thompson の “The Bloody Wood” (*The London Mercury*, 29 [1934], 233–239) などは現在でもなお示唆に富むエッセイである。

しかし、例えば Robert Crawford, Peter Ackroyd, Ronald Bush など

の最近の一次資料に基づいた研究によると *Sweeney Agonistes* は現行の作品（断片）からは想像もできないような壮大なプランのもとに書き始められたものであることが分かる。それゆえ今となっては、ストーリーの連続を問題にするよりも、詩人が *Ash Wednesday* に至るまでに初期作品以来の Sweeney 像とでもいうべきものを膨らませて、壮大なカリカチュア＝ドラマを展開しようとしていたと推測して、この推測の上で現行の *Sweeney Agonistes* を読んでいくほうが、*Ash Wednesday* での大きな詩的変化とその後の詩人の劇作への傾斜という発展の道筋を押さえた読みになるのではなからうか。

Sweeney Agonistes が実際上演された劇であるにもかかわらず、現実には今尚 *Collected Poems* に収められたままになっているという、一見矛盾した現象もこのような文脈のなかで捕らえ直すならば、それほど不思議なことではない。

第2回 1991年1月7日(月) 於香柏館第3共同研究室

報告者 石原堅司

文法観としての形式・機能・意味

言語の分析は様々な角度から成されるが、伝統文法においては形式・機能・意味の観点から行われて来たことは品詞分析に明白である。その内いずれに重点が置かれるかは文法観の違いに由来している。代表的なものは Jespersen と Sonnenschein の論争で、中でも法に関する両者の論点は興味深い。

「厄介な分野」を反映してか、法の接近法は多種多様であり、屈折が水平化・喪失した英語においてはその解釈を巡って他言語との比較も含め議論の見られるところである。Jespersen が法は「文の内容に対する話者の心的態度の表明」と述べている様に、それは言語の伝達面に多大に関わるもので、話者・聴者の関係を前提としている。このことは Halliday が法を「言語活動への話者の参加形態」とし、三つの言語機能の内の「対人的 (interpersonal)」機能と説明することからも肯首できる。科学的伝統文法の創始者とされる Sweet は分析基準を形式に置いたが、文法の対象を「形式が持っている意味」や「形式と意味の結び付き」と述べた上で、形式と機能を文法的なものとして同等に捉え、意味から区別している。Sweet の文法観を整理・発展させた Jespersen は、形式・機能・意味それぞれからの分析の必要性を説き、その内、形式を supreme criterion としている。また文法の課題を「意味範ちゅうと統語範ちゅう間の関係の探求」と述べているが、Jespersen 流に換言すると機能と意味であり、その機能は形式に実現されているものとしての機能なのである。

法は「意味的範ちゅうであり、形態的範ちゅうではない」とする Sonnenschein に対して、Jespersen は「統語範ちゅうであり、意味範ちゅうでは

ない」と反論するが、前者の意味的範ちゅうは機能と同等であり、後者の統語範ちゅうは機能に等しいということから、一見矛盾した議論のように見えるが、問題は Jespersen の機能にあり、形式・意味と同レベル的な説明に起因した訳で、morphoseme への改称は避けられなかったのである。両者は共に史的観点の重要性を認識しながらも、一方は個別文法観を、他方は一般文法観を志向した典型的な formalist と notionalist であったのである。